

説教 『救いの岩』山本 護牧師  
聖書 詩編 95:1~7/マタイによる福音書 7:24~29

「深い地の底も御手の内にあり、山々の頂も主のもの(詩編 95:4)」。早朝の散歩で拙宅がある茅ヶ岳から西山(南アルプス)をひと通り眺望する。鳳凰三山、アサヨ峰、甲斐駒ヶ岳。空気が乾いて晴れた朝には、八ヶ岳との境目・諏訪口の遠方に北アルプスの峰も輝き、詩編に感応して小さく讚美する。

「わたしたちを造られた方、主の御前にひざまずこう。共にふれ伏し、伏し拝もう(95:6)」。私もまた自然。想念は己自身にむけられる。私たちはまぎれもなく主なる神に創造された。この山々と共に、花や鳥と共に、神の御手で創造された被造物なのだ。私たちは偶然、世に現れたのではない。神によって一人ひとり手造りされ、一人ひとり微妙に違う私たちの隅々まで、大切に見守られているのだ。

岩塊「摩利支天」を抱える甲斐駒ヶ岳。数億年がかりの造山運動で変化しているそうだから、この地に人間が住み始めた縄文期にはあのような姿だった。竪穴式住居が建てられ、茅葺の百姓屋が建てられ、いろいろな家が建てられ、壊れていった。同じ岩塊を仰ぎ見ながら、人は生き、死んでいった。

「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている(マタイ 7:24)」。キリストという岩の土台。「雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである(7:25)」。激しい風雨は、人生の日々に起こる出来事の比喻で、長々と語られた山上の説教(5:1~7:23)が岩。そしてそれを私たちの土台とせよ、ということか。

それでは「言葉を聞いて行う(7:24)」とは実際、何をすればいいのか。神経質に字句通り実践するわけではない。イエスを受け入れ「自分の生き方とする」こと、「キリストとの交わりに加えられる」という意味ではないか。イエスの戒めを値引きしているわけではない。むしろ逆だ。キリストとの交わりこそ、いっそう根本的で、いっそう深く、私たちが生きていること全体で捉えるものである。

「わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた人に似ている(7:26)」。岩を土台としない者は、世のあれこれにふりまわされて、ひどく倒れてしまう(7:27)。だが岩なる言葉はすでに語られており(7:28)、しかもその「言葉」は犠牲となって私たちに差し出されている。つまりイエスが十字架の絶望に沈んだことで、もろい砂粒は堅牢な岩に変えられている。あの造山運動を凌駕するとしてつもない神の創造が、キリストの生命として再び、私たちに及んでいる。

大武川には石英や長石の白い川砂。つまり花崗岩の砂だ。十字架はこの川を遡り、砂のような私たちの足元を、固く美しい花崗岩に変える。私たちはまぎれもなく神に創造された者である。創造された者であるからこそ、私たちは自覚的に、主体的に、永遠なるキリストのものになろうではないか。

「主はわたしたちの神、わたしたちは主の民。主に養われる群れ、御手の内にある羊(詩編 95:7)」。ゆえに私は、誰にも、何事にも奪われない。力にも、権威にも、死の支配にさえも奪われない。だからこそ「主に向かって喜び歌おう。救いの岩に向かって喜びの叫びをあげよう(95:1)」と自然に感謝が溢れ出る。世の力ではなく、イエスの言葉に仰天するような群衆(マタイ 7:28~29)の一人でいたい。



#### 【おまけのひとつ】

キリストを確かめよう 考えるのではなく 素足の指に意識を集中させ 支えは何かを感じよう  
高く仰ぎ見るのではない 大地に伏して むかい合う 十字架はまさしくここに建てられている